

続「お遍路」で妻に叱られたこと

土居 修

近く夏にそこはかかない雰囲気があると涙した翌早朝、薄曇りの空を仰ぎながらも逆打ちを決定した。

今治市の第54番札所延命寺はすでに雨に煙り、暮色に染まった第46番札所淨瑠璃寺は雷雨に打たれていた。今宵のテント泊に憂慮の表情を隠しきれない妻に、「なんとかなさ」と鼻息荒く答え、久万高原旅行村に向けてハンドルを握りしめた記憶。

旅行村には6時過ぎに着いた。缶ビールを飲みながら、小康状態になるのを待ち続けること1時間、ようやく夕空に夏色が展がりはじめた。急いでテントを設営し、シャワーを浴びてB.B.Q. 常に私を叱る妻に対して久方ぶりに優勢にあるという感慨に酔い痴れて卓上に缶ビールが並んでいく。オーストラリア産の安い牛肉にも格別の味わいがあった。

所の中の難所中の難所であることは言を俟たない。800mの急勾配な坂道と不規則な階段を歩くこと40分。巨岩の中腹に埋め込まれたかのようには草手が佇んでいた。汗を拭き終え、宇和島市に向かう。行程約100km。晩夏の伊予路を走るの初めであった。30数年前の夏の終わりの一日に妻と初めて出会ったことをものはずみで思い出し、そのことを告げた。すると、妻はその日をどきどき語り始めたのである。いい加減に飽きてきて、適当に相槌を打っていたら、「ちゃんと聞いてよね、まったく」と叱られた。

その鳥居の近くに駐車し、参道を歩いていると、背後から白衣をまとった老母女がぞろぞろと歩いてきた。嫌な予感が脳裏に点じたので、妻を促し急ぎ足で石段を登る。仁王像に代わる守護役である狛犬の風情を楽しむこともせず、本堂・大師堂と先継ぎ早に回った。そして、納経所に行こうとして金剛杖を取ったとき、黒い大きなバッグを背負った女性が境内を小走り駆け抜けた。「しまった」と思った。

妻の右手が私の眼前に浮かんで来て、白魚のような人差し指が前方の壁を指さしている。見ると、A4版の黄色い用紙に横書きにされた文字群が飛び込んできた。

三信条
一 攝取不捨の御誓願を信じて同行二人の信仰に励む
二 何事も修行と心得て、グチや偽りを慎む
三 現生利益を信じ、88の煩悩消滅に励む

生きざまであろう。彼女の行為が間違っていたとも思われない。私の美学を強要するつもりもなかった。ただ「詫び寂び」が喪失されていく時代への苛立ちを初老の男が抑えることができなかつた経緯のことであった。

納経所を出て石段を下り始めたとき、はるかに前方の先ほどの女性、軽やかな歩みとは言い難い。後ろ姿に名状しがたい哀愁を視た。ひとつに束ねた黒髪が左右に揺れていることも妙にせつなく思えてきた。

「彼女は自分の仕事に誠実であったのだ。『詫び寂び』を失ったのは私自身ではなかつたか」と思ったとき、天空に吸い込まれていくような感覚を覚えた。菩薩の域に一步近づいているのではないかと悟った瞬間であった。

妻より先んじているという陶酔感に浸りながら、車に戻った。参道の風景は全く覚えていない。



今どきの学校



井上圭介

臨時の願書は提出していましたが、今年はどう声はかからんだろうな、と思いのんびりと暮らしてました。10月22日、高校入課から突然電話があり、須崎総合高校で社会科に病休が発生したので来てくれとのことでした。まあ私は現在、空いているし、いままで、須崎高校と須崎工業高校両校とも勤務してきましたが、たのび引き受けました。勤務条件は病休代替なので期限付き講師、久々のフルタイム勤務でした。定年退職してから10年、その間ほぼ時間講師として勤務してきました。現役時代から

50年間教壇に立てほんんとかなるかなと・・・やっと目標時間に近づきました。

私は授業の力量が思うように上達しないな、という悩みを持っていました。力量不足は経験時間で埋めようと考え、50年間教壇に立てばなんとかなるかなと根拠のない思いにとらわれ、やっと目標時間に近づきました。しかし、今回は期限付き講師、慣れた時間講師の勤務では感じなかった今どきの学校の勤務状況が見えてきました。

なんとといっても勤務時間の長さです。8時25分の職期に間に合うように余裕をもって8時10分ごろに出勤すると職員駐車場は満杯です。君たち何時にきているの、と思っしてしまいます。多分1時間前くらいから来てるんじゃないでしょうか。

次に授業時間、私は17時間です。社会科でもっと多い人もいます。それにホーム、校務分掌、各種委員会、教科の打ち合わせ、ひっきりなし訪ねてくる生徒、巨大な職員室(普通科、工業科すべ

ての教員を一つの職員室に集めている。休み時間は混沌としてカオス状況です。夜は言うまでもなく勤務時間終了後の5時から会議が予定されています。ほんま誰も文句言わんのか。定時の教員いわく、我々より遅い、でした。働き方改革、どこ吹く風状態ですね。現場の教職員一人ひとりの自覚がきわめて大事ですね。

生徒とのふれあい③

谷内純一



私は生徒部長でした。一人の生徒とお父さんが問題行動で校長先生から処罰内容を言い渡されることでした。生徒はふてくされきつた態度でした。やがて校長先生は話をやめて、言いました。「君の態度は私の話を聞く態度ではないね。これではいくら話しても無駄だ。今日は帰って、明日出直してきなさい。あす、学校側の考えを伝えよう。」とお父さんは仕事を休んで遠路学校まで来ていました。また明日来ることは大変な負担です。校長室から廊下へ出ると、すぐにその生徒は言いました。「先生、おれ学校をやめる。」と。私は言いませんでした。「君は建築科三年生だ。君が家を建てていてハコの方でかかっているでしょう。何か腹が立つことがあったとして、これを壊してしまっかね。そんな馬鹿なことほしはないはずだ。君は建築科三年生。今は二学期だ。もう少し卒業まで。一時的怒りにまかせて今までの勉強や努力を無駄にしてはいけません。今日は帰って頭を冷やさない。明日は学校に来て校長先生に叱られるなさい。そしてなんとしても学校は卒業するんだ。」彼は思い直し、無事卒業しました。別の高校での話。成績がひどい悪い生徒に勉強の仕方について話していました。すると彼は突然弱々しい声で「先

生、ばかあ、近頃なぜ勉強するのか分からなくなったあ。」と言いました。不意をつかれて私はぐっと声か詰まりました。彼は日本人ではなく韓国籍でした。たとえ成績がよくても就職には厳しいものが予想されました。暗い思いを振り払って、私は彼に力を込めて言いました。「そりやあ、お前の世を生き抜くためさ。」と。果たして心に届いたかどうかと思いつつも、心の中をひんやりとしたものが流れました。

でも卒業式の日、彼は満面の笑みをうかべていました。あんなに卒業を喜んだ生徒を見たことがありません。心の中のひんやりしたものは何か。それは彼の心を燃え立たせた授業を一度も展開できていなかったかという自責の念です。今なら、彼の心に火をともし授業をしてあげる自信はあるのですが、後の祭りです。

ただ卒業時の彼の喜びようは自力で卒業を勝ち取った自分に対する喜びであつたらうと思つと心はやすらぎます。